

牽制球について

A pick-off throw

1J02C200

芳賀 崇

指導教員

主査 葛西順一先生

副査 彼末一之先生

1. 緒言

投手が走者に対して牽制動作を行う理由としては2つのことが挙げられる。1つは走者に良いスタートをさせないようにし、盗塁を防ぐという効果があること。そして2つ目は出塁した走者を牽制球で刺殺し、ピンチを脱するということである。走者は常に守備側の隙を見て次の塁へと進もうと考えている。走者に投球の癖を見抜かれないように気を付けなければならない。走者によいスタートを切らせないことである。投手が走者に対して油断していないということを見せることによって、それだけでも走者を心理的に牽制することが目的として達成することができる。「あの投手は牽制球をほとんど投げないが、スタートが切りにくい」と選手が言うことがあるが、それは油断がないことを態度で示す投手に対してであることが多い。これこそ投手が持つべき理想の技術である。打者へ良い投球をするだけではなく心理的な駆け引きにも強い心構えと高い技術が必要である。バント処理や牽制球などの技術を未習熟のままにするのではなく、投球以外の不安要素を解決しておく必要がある。

2. 研究動機

私自身、小学生の頃から現在までの16年間、投手として野球をしてきた。レベルが低い小、中学生の試合を見ると、打たれる以外にも投手によるバント処理の失策や、牽制球の悪送球によって走者を進塁させてしまう場面をよく見かける。ピンチの場面に三振や凡打などで打者を打ち取るほか、牽制球によって走者をアウトにすることでピンチを脱し、勝利への試合の流れを手にもすることも

よくある。これまで目にした野球に関する参考書を見ても、投球における一連の動作や変化球の握り方などは詳しく書かれていても、牽制について専門的に書かれている文献は見かけないということ、私自身が牽制球を得意とする投手であることから、その重要性和メカニズムを分析し、牽制という技術を改めて考えることを目的とし、今回のテーマに取り上げることにした。

3. 結果

今回の実験から2つの内容について解析結果をあらわすことにした。1つ目は、大きく足を上げてからの牽制球と、素早く投げることを意識した牽制球を比較し、その投球動作にはどれほどの時間差があるのかという内容である。同じように本塁への投球動作についても比較する。2つ目は、走者に対して一瞬、本塁への投球をするように見せかけておきながら、実は牽制球を投げるという、走者をだます意図を含んだ牽制球がある。このひっかけの牽制動作と、足を上げての本塁への投球動作について、XY平面で見た、両肩峰を結んだ線とY軸がなす角度変化の表れを三次元重ね合わせの映像から解析する。同じように、ひっかけの牽制動作と足を上げてから1塁へ牽制球を投げる動作についても、上記と同じ角度変化を解析し、この結果から投手には、どのような上半身身体の類似と相違があるかをみてみる。

4. 結論

牽制球と本塁投球のどちらの投球動作でも、右足の始動から右足の着地までにかかる所要時

間は、速い動作での牽制球と本塁投球を行った場合においては、足を上げた牽制球と本塁投球と比較すると、半分以下の値となっていた。右足の着地からリリースまでにかかる所要時間は、牽制球と本塁投球のどちらの場合でも、足を上げた動作と速さを意識した動作でも、その差はほとんどあられなかった。投手が走者を刺殺する目的で素早い投球を行うときに、自由足の始動から着地までに要する時間を短くするという意識を持つことが重要であるといえることがわかった。投球動作をXY平面からみた両肩峰を結んだ線と

Y軸がなす角度変化のグラフ結果と比較から、投手が打者を刺殺することを目的に走者をひっかけようとする牽制動作において、Y軸に対して少しずつ正の角度の値を大きくしながら、途中に一瞬だけであるがY軸に対してマイナスの方向へと角度変化があらわれた。この動きを意図的に動作に取り込むことによって、一瞬だけではあるが、本塁への投球と思わせることができる。実際の解析の結果データにも投手の意思があらわれていることが発見できた。牽制球としては、この一瞬駆け引きこそが重要なのである。